

武士道は日本特有の精神であり、その淵源をたどれば遙かな過去にまでさかのぼることができる。そもそも武士という存在が歴史的に定着したのは凡そ千年も前で、「もののふ」と呼ばれたのは「武器（もの）を持った男」という意味であった。武士の発生当初は寺社や公家の所領である「荘園」を護るための私的な存在として有ったが、次第にその武力は公的なものとして認識されていく。平安時代の後期に頻発した地方の騒乱を鎮圧するための出征は武士の晴れ舞台となった。

平安朝の武士として名高いのは清和源氏と桓武平氏だが、その他にも受領として地方に下り、土着した勢力が存在する。中央の武家貴族の末裔が没落していく中で、清和源氏や桓武平氏は東の蝦夷対策と西の海賊討伐で名を成し、勢力を蓄えて行った。しかし、平安末期に起こった保元、平治の乱に置いては未だ武士の主体性は未成熟で、貴族階級の支配下に居た。平清盛の貴族社会への登壇で藤原氏に独占されていた政権が履替えされる。そうした事を経て、都を離れた鎌倉に源頼朝を主体とした武家の政権が立ち上げられた。

武士団が自らの存在を顕在化させるのは鎌倉幕府の成立以降だと考えるが、その根本となったのは『御恩と奉公』という精神構造である。これの延長上に『滅私奉公』という思想が出て来るのだが、まだ先の事である。

日本の経済の根本は長らく農本思想に在った。『御恩と奉公』もその流れで、主君から土地の支配権を賜るという「御恩」に対して主君のために誠心誠意働くという「奉公」で尽くす。普段は頂いた土地を耕して収穫出来た物を租として収める事で良いのだが、一旦有事の際には当然ながら戦場に出る事も有り、主君のために生命を賭ける事も有った。その際には怯懦、不覚悟は厳しく排斥された。

武士道という概念は未だ未成熟だったとしても、その根本に流れる意識は既に確立されていたと考えられる。鎌倉期末頃から南北朝期、室町期の戦国時代を経て、豊臣秀吉の『天下総無事令』が發布されるが戦乱が完全になくなったわけではなかった。秀吉の没後に起きた関ヶ原の戦いから徳川家康による豊臣家の滅亡を経て、『元和偃武』と呼ばれる時代が到来する。

『元和偃武』とは、徳川幕府が大坂城に籠る豊臣家を滅亡させた事で、大規模な戦争（軍事衝突）が終了した事を示す言葉である。江戸幕府は朝廷に年号を慶長から元和に改めさせ、天下平定の完成を宣言するとともに『武家諸法度』を公布し、江戸幕府の武士統制の根本を提示し

各地で軍学者が台頭し、「兵学」という新たな学問が構築されるようになっていくのはこれ以降である。

江戸時代となって、かつてのように武力を行使する機会は少なくなったが、戦国の時代を生き抜いて来た武士が消えたわけではない。支配階級である武士が滅多やたらに武器を振

り回す事は一応禁止されたのだが戦国の遺風は残存していた。主君や領地を失った武士で、習い覚えた武術で一旗揚げようとする者は海外に雄飛し、東南アジアの各地に形成されていた「日本人街」に居を移して活躍した。シャム（タイ）で諸侯に任じられた駿河国出身と伝えられる山田長政は有名であるが、スペインの傭兵となってフィリピンのマニラを中心に活躍した武士団は今日ほとんど知られていないが、スペインの歴史書にはその存在が記録されている。

国内では新たな施策として儒教道徳で武士を教化する事が考えられた。既に大量にもたらされていた漢籍（中国伝来の書物）を学んでいた知識層は臨済宗の僧侶を中心に地方にも及んでいた。そんな中で近世朱子学の祖と称えられる藤原惺窩は幕府に招請されたが固辞し、弟子の林羅山を推薦する。林羅山は推薦を受けて徳川家康以下家綱に至る将軍に仕えた。

朱子学の開祖である朱熹は宋代の学者で、明代の政治は朱子学を根本とした。朱子学は儒学の經典に関する解釈をまとめた学問で朱熹によって大成された。大雑把に言えば儒学を解釈と理解の方向で発展させたもので、明代の政治の根本とされたので正当儒教として認知され、明の属国だった朝鮮でも学ばれた。我が国で登用された最大の要因は朱子学の提唱する『大義名分』論にあった。

一方で明代には王陽明によって大成された陽明学が現れ、朱子学を真っ向から批判した。我が国にもその思想は中世にもたらされ、朱子学とは別な学問として考究されてきた。朱子学に比べればマイナーな存在であったが、日本における陽明学の祖とされる中江藤樹は『知行合一』の思想を実践し、近江聖人と称えられた。岡山藩に招かれた熊沢蕃山は最古の藩校「花鳥教場」の教授となった。さらに蕃山は優れた行政官として腕を振るっている。

陽明学は過激な思想的側面を持ち、結果からの判断であるが幕政に異を唱えた一面があつて忌避された。

江戸時代後期、大坂町奉行所の与力であった大塩平八郎は私塾「洗心洞」を開いて子弟に陽明学を教授していたが、天保の飢饉に際しては自らの蔵書を売って難民を救済しようとするも抜本的な効果が得られず、幕府に反乱を起こした。幕末には西郷隆盛、吉田松陰らも陽明学を学んでおり、松陰門下の長州人に多大な影響を与えている。

武士の規範は「兵学」によってまとめられた「武士の在り方」という原点から、さらに儒教(朱子学)の道義を加味した精神を基にまとめられた。「五倫」・「五常」はそれぞれ儒教における五つの基本的な人間関係を規律する徳目であるが、『父子「親」あり、君臣「義」あり、夫婦「別」あり、長幼「序」あり、朋友「心」あり』と述べられる「五倫」が道徳の根本として提唱され、「五常」は人の常に守るべき五つの徳目、「仁」「義」「礼」「智」「信」として掲げられた。

「武士道」という言葉を最初に用いたのは江戸時代初期の人である大道寺友山であり、『武道初心集』などの著作に記されている。「武士道」という言葉はその後も一人歩きする事なく、精神構造の奥深くに堆積されていった。さらに時代が進むと「武士道」の根本は『忠孝』に集約される。主君に捧げる「忠」と親に呈する「孝」が武士としての道であるという

認識で、場合によっては死を賭しての行動となる事も覚悟しなくてはならないとされた。

『武士ならば名誉のためには死をも厭わない』という究極の意識の昇華が起こったように伝えられるが、太平の世における武士の精神にさほど過激な進化は普遍化しなかった。

江戸時代も後期になると、諸外国船の日本近海への来航という事態に、各藩では藩論の統制と教化の為に盛んに「藩校」が開かれた。従前からの漢籍を学ぶ事と武芸の修練を根本としていたが、それ以外に「洋学」を取り入れる藩もあった。西洋の学問は唯一国交のあった和蘭陀（オランダ）から学んだので「蘭学」と呼ばれた。「蘭学」からの知識は軍学、医学を中心に広範に^{わた}亘り、反射炉を構築して金属の鑄造技術を体得した人もいる。^{ちな}因みに、それまでの日本の鍛冶技術は主として鉄の鍛造であり、鑄造の技術は工芸品などで用いられていたに過ぎなかった。

「武士道」が発揮されたのは、主として幕末に「佐幕派」だった諸藩においてであったが、優れていたのが会津藩であり、庄内藩であった。国難に際して一命を賭して戦い、あっぱれ武士の本分を全うした。「武士道」に基づいた戦後処理が行われた庄内藩と、死者に対してまで無慈悲な処置を強制された会津藩の差は、「武士道」を理解しているリーダーが居たかどうかの差であった。会津の悲劇は「武士道」の崩壊していた西軍に攻められた事に尽きる。長州の奇兵隊は武士以外の雑多な人員を包含しており、戦闘能力は高くとも「武士道」とは無縁の組織であった。

大東亜戦争において幾多の軍人が発揮した「武士道精神」は、前代から連綿と続く精神であり、軍人一人一人に叩き込まれた『忠君愛国』の思想に繋がっていた。

戦後、『忠君愛国』『滅私奉公』を完全否定する事があたかも民主主義の精神を受け継ぐ者の在り方であるかのような指導がなされた。結果、日本人の本義を忘れ「心」を捨てたような言動に終始する人間が激増しているが、占領軍（GHQ）の施策で日本民族の伝統が徹底的に破壊され、日本精神を廃滅させようという思想統制に基づいた教育に依る。国民が自らの国是を捨てる事は『亡国の民』になる道を求めることに直結する。GHQの強制で国の根幹が揺らいだ中でも日本の精神を伝える道は消えていない。

遙か二千年以上も続いて来た日本の歴史が途絶えなかったのは、日本精神の根本が『自他共存』に根差しており、自分たちの思いとは異なっても頭ごなしに否定、排除する事無く柔軟に対処する許容性を有していたからであった。この許容性こそが「武士道」の真意であると信じたい。

「騎士道」とは、中世ヨーロッパの騎士階級の精神規範を示す言葉で、キリスト教及び団結精神の影響下に発達した。敬神、忠誠、武勇、廉恥、名誉、を重んじる事と、婦人への奉仕などの徳を理想とし、現代においても社交界のマナーとして活かされている。

騎士の淵源^{たど}を辿ると、先史時代のガリア人、ゲルマン人部族まで遡る事が出来、その後のヨーロッパ世界に広まったと考えられる。ガリア人社会では自由民の親の許に生まれた全ての若者が成人して自らの健康を証明すると、「槍と盾、ベルトに剣」を授与される儀式を

受け、戦闘団に入団した。この儀式こそが「騎士叙任式」の起源と考えられている。

騎士の発生はフランスで、キリスト教という絶対的な崇拜対象（敬神）を頂点とし、王以下騎士、庶民という人間の組織ピラミッドを構成する縁^{よすが}となった。騎士は王に対して忠誠を誓い、武勇、廉恥を重んじたが、騎馬して戦う事で、後に一つの階級としての位置付けを得る。騎士が一般に認知されるのは中世初期であり、ビザンツ王国の救助要請を受けて派遣された「十字軍」を端緒とする。当初は単に騎馬して戦う者を騎士と呼んだが、中世末期には貴族階級の一員として位置付けられる。

まとめ

騎士道は理想的な側面を有し、状況においては柔軟に適用される側面が強い。何より騎士道は封建社会において「秩序を保つための規範」として機能し、決して「軍事的な規範」ではなかった。その例証として、騎士たちは戦争の際に捕虜となった場合、身代金を支払う事で開放される慣習があった。

「武士道」と「騎士道」の違いは、勿論育まれた歴史背景に拠る所が大きい。「武士道」が五百年にも及ぶ戦国の時代を経て、『元和偃武』を迎えた江戸時代に体系化され、特に武士階級の精神的な支柱として平和な時代を迎えても機能した。一方で、ヨーロッパの騎士道は封建制度の崩壊とともに徐々に形骸化し、ルネッサンス期以降は観念のみの存在と化した。

先述したように「騎士道」は戦う武者の精神的寄る辺としての側面を有していなかった。それよりも社交界での洗練されたマナーを発揮する事で、庶民階級との格差を表現する「場」の意識として珍重された。